プロセスモデルにおける 5 段階の感情調整と 日本語版 ERQ についての検討

吉津潤

(関西大学大学院心理学研究科)

キーワード：感情調整のプロセスモデル・日本語版 ERQ・反応焦点化感情調整

A full range examination of the process model of emotion regulation and the Japanese version of ERQ

Jun YOSHIZU

(Graduate school of Psychology, Kansai University)

Key words: process model of emotion regulation, Japanese version of ERQ, response-focused emotion regulation

目 的

Gross & John(2003)による感情調整のプロセスモデル(Process model of emotion regulation)では、感情が介入する段階によって、状況選択、状況変更、注意配置、認知的修正、反応調整の 5 つの感情調整のプロセスを定義している。これらのうち、感情調整の初期の段階が前件焦点化感情調整であり、状況選択、状況変更、注意配置、認知的修正が相当する。感情が生じた後の段階が反応焦点化感情調整であり、反応調整が相当する。Gross & John(2003)は、前件焦点化感情調整のなかから認知的修正を取り上げ再評価方略とし、また反応焦点化感情調整の反応調整を抑制方略として感情調整質問紙(ERQ)を開発した。前者は Well-being に対してはプラスの影響があるが、後者は Well-being にマイナスの影響があると主張し、多くの研究でその主張の裏付けを試みている(John & Gross, 2007)。しかし、再評価以外の前件焦点化感情調整を取り上げていないし、反応焦点化感情調整を反応抑制でのみ検討しているなどの問題点がある。

Schutte et al. (2009)は、Gross らの前件焦点化感情調整の 4 プロセスと、反応焦点化感情調整を経験的調整、行動的調整、身体的調整に 3 分類したものについて、各 4 項目からなる質問紙を作成した。各 4 項目の内容は接近と回避の 2 間ずつであった。調査の結果、前件焦点化感情調整が全体として Well-being にプラスであることを確認したが、反応調整は全体としては Well-being にマイナスではなかった。Amemiya, Sekiguchi, & Yoshizu (2009)の日本語版 ERQ を用いた調査でも、抑制が Well-being にマイナスではなかった。

これらの結果から反応調整(抑制)のプロセスについて、より詳細な検討が必要であることが示唆された。本研究ではプロセスモデルにおける 5 段階の感情調整のより詳細な検討を目的とし、Schutte らが開発した感情調整プロセスモデルに関する質問紙と日本語版 ERQ との関連について検討した。

方 法

調査対象者：大学生 208 名(男性 63 名、女性 144 名、無記入 1 名、平均年齢 19.09 歳、標準偏差 0.87)であった。

質問紙：日本語版 ERQ (Amemiya, Sekiguchi, & Yoshizu, 2009) の一部翻訳を改訂した尺度と、Schutte et al.(2009)の ERQ に関する 28 の質問項目を翻訳したものを使用した。

Table.1 日本語版 ERQ と ERQ に関する質問項目(下位 7 尺度)の相関係数

	状況選択	状況変更	注意配置	認知的修正	経験的調整	行動的調整	身体的調整
ERQ再評価	.274**	.429**	.383**	.700**	.420**	.366**	.149*
ERQ抑制	-.117	.008	-.131	-.014	.000	-.027	.006

*p<.05,**p<.01

結 果

日本語版 ERQ について探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、固有値は第 1 因子が 2.85、第 2 因子が 2.37 であった。スクリー基準から 2 因子解を採用した。2 因子で全分散の 52.2%を説明している。第 1 因子は再評価の 6 項目($\alpha=.749$)、第 2 因子は抑制の 4 項目($\alpha=.794$)であった。再評価と抑制の間に有意な相関は示されなかった。

Schutte らの感情調整プロセスモデルに関するオリジナルの下位 7 尺度と、日本語版 ERQ の 2 尺度について相関を求めた。Schutte らのオリジナル下位 7 尺度と日本語版 ERQ の再評価とは全て有意な正の相関が認められた。相関係数は順に、認知的修正とは.700、状況変更とは.429、経験的調整とは.420、注意配置とは.383、行動的調整とは.366、状況選択とは.274、身体的調整とは.149 であった。抑制とはいずれも有意な相関は認められなかった(Table.1)。

Schutte らの感情調整プロセスモデルに関する質問紙について探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、固有値は第 1 因子から順に 31.8、10.1、6.9、6.5、5.3、4.5、3.6 であった。スクリー基準から 7 因子解を採用した。7 因子で全分散の 68.7%を説明している。第 1 因子は経験的調整の接近 2 項目、行動的調整の接近 2 項目、身体的調整の接近 2 項目、注意配置の接近 1 項目の 7 項目であった。第 2 因子は認知的修正の接近 2 項目と認知的修正の回避 2 項目の 4 項目であった。第 3 因子は状況変更の接近 2 項目と状況変更の回避 1 項目の 3 項目であった。第 4 因子は状況選択の回避 2 項目、状況選択の接近 1 項目、注意配置の回避 2 項目、注意配置の接近 1 項目、状況変更の回避 1 項目の 7 項目であった。第 5 因子は経験的調整の回避 1 項目と行動的調整の回避 1 項目の 2 項目であった。第 6 因子は身体的調整の回避 2 項目であった。第 7 因子は経験的調整の回避 1 項目、行動的調整の回避 1 項目、状況選択の接近 1 項目の 3 項目であった。

考 察

Schutte らの質問項目を因子分析した結果、前件焦点化感情調整の 4 段階は接近・回避を問わず、それぞれの因子としてまとまっていた。特に認知的修正と日本語版 ERQ の再評価の相関は最も高く、これらの結果は Gross らの主張と一致する。しかし、反応焦点化感情調整は接近と回避によって因子が分かれ、より複雑な結果となった。日本語版 ERQ との比較では再評価と正の相関がみられ、抑制とは相関がみられなかった。これらの結果は反応焦点化感情調整が Gross らの想定より複雑であり、異なった観点(Koole,2009)からのアプローチが必要であることを示唆している。

参考文献

Schutte,N.S., Manes,R.R., & Malouff,J.M. (2009). Antecedent-focused emotion regulation, response modulation and well-being. *Curr Psychol*,28,21-31.